白川研究所便り

第3号
発行
08.3.30

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-466-3470
Mail toyomoji@st.ritsumei.ac.jp
URL http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/index.html

「白川静生誕之地」記念碑（福井市大手3丁目）

目次◆index

白川静先生の「戦場」　副研究所長　木村一信　2
白川先生との出会い
—白川漢字学の一部の英訳を意図するに至るまで—　シュミツ・クリストフ Christoph Schmitz　3
白川静先生没後一周年記念講演報告　研究員　高島敏夫　5
二〇〇七年度 研究事業運営委員会の活動　運営委員　芳村弘道　7
学生諸君との白川文字学勉強会　研究員　高島敏夫　9
二〇〇七年度の文化事業活動について　運営委員　志垣陽　10
第二回立命館白川静記念
東洋文字文化賞について　運営委員　上野隆三　13
編集後記　運営委員　萩原正樹　16

白川静先生の「戦場」

副研究所長　木村一信

白川静先生が、ご逝去されて一年半近くの時間が経つ。この間、先生を喪った私たちの空白の思いは、大きくなるばかりであるが、一方、先生の業績や生涯が、変らず出版され続け、また、マスコミなどで取り上げられたりすることが相つぎ、なお、身近に先生の存在を感じることも多い。私たちは、よりいっそう先生の研究・学問の継承に努力を傾けると共に、白川文字学を教育の現場や一般の場へと、さらなる普及と啓蒙する活動にも力を注ぎたいとの思いを新たにしている。

私は、先生が九〇歳をこえられた、いわゆる晩年に入られてから親しくお目にかかる機会を得た。もちろんそれまでにも、立命館大学の諸行事にて、名誉教授としてご出席される先生のお顔を遠くから拝見することは幾度かあった。が、「立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所」の構想が具体化した頃から、役職上、直接に先生とお会いするチャンスがおとずれたのである。時に、京都市の西南に位置する桂の先生のご自宅に足を運ぶことになった。私にとっては、白川先生のご自宅にお伺いし、先生の肉声に触れる時間をもちえたことは、何にもまして喜ばしいことであった。

先生の亡くなられる五か月ほど前のある日（二〇〇六年五月のこと）、研究所の運営のことなどの打ちあわせで三人ほどで先生を訪ねた。用件が一段落したところ、先生は「私の戦場を見せましょうか」と言われ、私たちを書斎へと案内された。「戦場」というのは書斎を指して言われたのである。車のガレージを改造して書庫兼書斎にされている一室は、机の前面、後面に本が並べられ（すべて書棚は二重もしくは三重に本がつめられている）机と椅子とがそこにはさまれて、椅子のうしろは人が通れないほどの狭さである。机上には、書きかけの原稿紙があり、つい先ほどまで執筆が続けられていたことを感じさせる。「ここで、私は、毎日、一日に二〇枚の原稿を書いています」と先生は言われる。四百字詰原稿用紙に、一日に二〇枚という分量がどれほど大変なものであるかは、研究論文や学術的な文章を書く方には理解できるであろう。もちろん、万年筆での手書きである。私たち三人は、圧倒される思いで、言葉も発せず、その場の情景をただ眺め続けた。先生が「戦場」というおだやかならぬ言葉を使われたのは、まさにここが「命」を賭して研究を進められている場であるからだと実感し、それを目のあたりすることができた私たちは、何とも言えぬ感動につつまれる思いがした。

その年の七月二八日、立命館大学で開かれた研究所の運営委員会に白川先生はご出席になられていた。その夏休み、暑さの厳しい時など、先生はあの書斎で今日もノルマの二〇枚の原稿を書いておられるのだと、ふと思いうかべたりもした。一〇月に入り、先生が入院されているとの報を得た。時折、体調を崩されることがあり、二週間前後の入院をされると聞いていたので、まさかそれが最期のご入院になるとは思いもしなかった。一〇月三〇日に、先生はついに帰らぬ人となられた。ご長女の津崎史さんは、次のように記しておられる。

亡くなる数日前に幻覚症状があらわれました。天井の模様が原稿に見えるというのです。活字があって、ところどころに甲骨文字が見える。何が書いてあるのか—と、一生懸命見つめていました。（中略）父は、一生現役の人でした。最後の講演が九月十六日。入院前日の十月五日には

『続・文字講話』の初校の校正を終えました。九十六歳にして、意欲的に仕事にこだわる姿を近くに見ることが出来たのは幸せなことでした。（「私の中の父」、『月刊百科』、平凡社、二〇〇七・一）

「一生現役の人」とご長女が言われたその仕事場―先生の言葉では「戦場」―は、今も私の脳裡に鮮明にある。白川先生が学問・研究に打ちこまれた情熱と意志、そして何より使命感の強さは、簡単に追随できるものではないと思う。しかしながら、先生の業績を受けつぎ、伝え、普及させていくという研究所の役割は、大きいものがあると私たちは考えている。今後共、変らぬご支援とご協力を多くの方々にお願いするものである。

（立命館大学文学部長）

白川静先生の「戦果」（『字通』の校正紙）

白川先生との出会い

―白川漢字学の一部の英訳を意図するに至るまで―

シュミツ・クリストフ
Christoph Schmitz

私は、五年間、定期的に対話、手紙、電話をかわし、じかにお話できた、おそらく最後で唯一の「西洋」の学者として、先生の印象を述べたいと思います。先生は私にとって、この上ない説得力のある理想的な学者でした。

私はずっと思想史における漢字の役割を知りたかったのですが、どんな学説を読んでも説得的な漢字論がなく、いわゆる専門家でさえ漢字を徹底的に理解・解釈していないことがわかり、絶望させられていました。それでまず音義派の藤堂明保氏や石井勲氏などの字書を使おうとしたのですが、残念ながら精神史的な面では役立ちません。そんな私は朝日新聞一九九七年二月のシリーズ記事で白川先生の業績を知りました。哲人的に真実を求める、共感できる漢字学者・白川静です。それで、私は「無」の場合のように哲学・思想概念にもなった漢字を『字通』から翻訳し、博士論文『日本と東アジアの哲学・思想史の草分け―主要著作と主要方法』（一部は『日蘭学会会誌』二〇〇四年・第五十二号に英語で公表）に役立てました。私は白川先生の漢字学が思想史観に与える徹底的な衝撃に目覚めつつありました。

先生の字説に基づき、ドイツの市民大学で二年間漢字基礎コースを教

えたこともあります。私は、幾つかの質問を抱え、「西洋」の学界では知られていない、漢字文化圏のこの碩学に会いたくなり、ドイツから手紙を出すと、あの力強い手書きの返事がすぐ届き、約束がとれたのです。

二〇〇一年八月の猛暑の日、妻と共に桂のご自宅を訪問。堂々たる話ぶりで興味深いお話が始まりました。たとえば、漢字の教え方について尋ねると、先生は部首順で教えるのは問題だ、「捨てるべき」だ。『説文解字』のせいで「部首に間違いが多い」と。私は先生の確たる学識による説明を聞いてすぐに安心立命を得ました。先生は若、笑、及、急、懐、還、譲、王を甲骨文で書き、口（凵）の本当の役割がわかると部首の意味がさらに崩れるとも言われました。

当時の私は、易経と儒教の日本思想への影響を探っていましたので、孔子の正名論と故郷の国名魯も話題になり、儒の字説も聞きました。ドイツの国名として日本人が使う獣偏の漢字に話が転じた時、―品格ある学者中村元と同じく、白川先生は使用を控えていらっしゃる―政治家や学者が隠そうとするのと対照的に、先生の剛直な性格のゆえでしょうが、「これが（日本人の）中華思想です。英に獣偏を付けたこともありましたよ」と言われました。さすが白川先生なら信用できると直感しました。

2003年に白川先生に再会した頃

先生は、今後の研究課題として「字源から語源の研究に入りたい」とし、「『字通』以降も研究はまだまだ続きます」。「九十一歳だからいつまで生きられるか…こればかりはわかりませんな、ハッハッハ」と大笑いされました。

まもなく、私は東京大学大学院法学政治学研究科での思想史研究に加えて文字学をもっと学ぶため、中国語中国文学科において「漢字の起源とその発達」を聴講。二〇〇三年敬老の日に再びお宅を訪ねました。話は、フレーザーの人類学、文化史論、体系、方法論、権威主義、役人、翻訳と著作権などにも広がり、興味は尽きませんでした。

先生の業績を外国に紹介するなら、何が適当な入門書かということに話が及んだとき、先生の文字学論の翻訳を呈示しましたところ、先生は当時まだ『常用字典』とされていた『常用字解』の原稿を私に見せてくださいました。「私の『字統』はちょっと難しい。…（『常用字典』）がわかりやすかろうと思う、…はじめに読んでいただくのにはね。これから読み始めていただくほうが順序はよろしい。」私が、文字学的に明らかに間違った現在の日本の省略字形をどう糺すか、文部科学省に話しかけたことがあったか、とお聞きすると「役人は好かん（笑）。」学問とは何かについては、「これ（文字学）ほど確かな出発点を持つ学問はちょっとありません。」つまり文字学にはまさに学問・科学の体系性と確実性があるということです。先生のお話はより剛直に、より腹を割ったものになり、勢いを増していくのでした。先生のご著書を賜ったのも忘れられない思い出です。

この訪問は、さらに、白川先生の学問を漢字文化圏以外にも広く世界に伝えようという私の使命感を増幅するものになり、それが『常用字解』の英訳刊行を思い立つに至った所以であります。先生は二〇〇五年の夏に二回も入院したことを電話で話され、私は翻訳の完成に努めました。完成原稿を見せることはできませんでしたが、死の前に私の努力を喜んでおられたと聞いて、私は慰められております。白川漢字学の精神史的、文化史的意義を狭く日本や東アジアに閉じ込めておかないで、世界に向けて開いたものとして顕彰していきたい、それが私の念願であります。

白川静先生没後一周年記念講演報告

研究員　高島　敏夫

昨年十一月四日（日）、福井県立図書館主催の「白川静先生没後一周年」の行事として企画された講演で白川先生の思い出を語る機会を与えられた。

会場は四十名の定員であったが、参加者は非常に熱心な方たちばかりだった。ご高齢の方もおられたが、若い顔も混じっている。どの顔にも白川先生への尊崇の念が溢れているのを感じた。きっと先生ご生前のエピソードを少しでも多く聞きたいと思って来られたのであろう。

私が話した内容は学生時代に先生から直かにお聞きしたことが中心であった。「コーヒー一杯飲んだつもりで書物を買いなさい。キミー、書物は安いよ。」と口癖のように仰っていたことや、「古本屋をはしごして一冊の書物を読んだ。この方が集中できるのじゃ。」といった豪傑談も紹介した。その他、先生の随筆にはあまり出てきそうにないエピソードや、先生の人間観といったものを私なりに色々紹介してみた。

ただ、そのようなエピソードを紹介しただけで終るのでは福井に来た甲斐がない。そもそも「白川文字学の新しい展開に向けて」という標題を掲げていたのである。また少々専門性の高い話しをするつもりだという断りを入れてもいた。受講者の方々もある程度そのような心づもりで来ておられたものと思う。私がそのような大仰な題目で話すつもりだったのは、一つは、先生の文字学の最も中心にある「凵」字形載書説についてである。言い換えればノリトとは何かということを具体的に説明することである。もう一つは、白川文字学の特質についてである。いずれも一般には十分に理解されていないと日頃から痛感していた問題であった。

前者については、昨年の追悼文に少しだけ言及したので関心をもって下さった方もあると思う。また本学の中国文学専攻が発行する『学林』の白川先生追悼記念号にかなり踏み込んで論じておいたので、そちらの方をご覧頂けると幸いなのだが、ここでも簡単に記しておくことにする。以前にも少し書いたように、ノリトとは元来宗教的な意味を帯びた王命のことで、王や天皇が神の資格で発する命令的なことばが原初形態としてのノリトである。さらに重要なことは、文書政治の始まった律令時代になってはじめてノリトというものが発せられるようになったのではなく、そのはるか以前から口頭で発せられてきたものだということである。念押し的な言い方をするなら、原初形態としてのノリトは口頭で発せられたものであった。むしろこの口頭で発せられる歴史の方が長いと思われる。そのような口頭伝達の内容がある時期になって文字に記されるようになる。そういう歴史を辿るわけである。

また「のる（宣る）」はもともと上から下へ口頭で言い下すことを意味する言葉であって、決して下から上に申し上げることを意味する言葉ではない。神に申し上げる方はむしろヨゴトという言葉が存在する。厳密にいえばノリトには区別があるのである。ノリトと呼ばれたものによって展開された古代宗教と古代王朝との関係を理解するためには、この区別が重要な意味をもってくるわけである。ノリトとは「神様に申し上げる言葉」であるというように言うだけでは、訳も分からないまま神がかりの世界に引っぱられて行って、現実世界に帰ってくることができないことになる。殷王朝やわが国の古代王朝を考える場合に、この原初形態としてのノリトを理解しておかないと、学問的には理解しにくいのであ

る。

今しがた原初形態という言葉を用いて表わしたが、別の言い方をしても良い。例えば、〈広義のノリト〉・〈狭義のノリト〉という概念規定を用いる方が、ノリト概念を外延と内包との両面から理解できるからである。その意味で言えば、原初形態のノリトが〈狭義のノリト〉であり、後起のノリトを含めて言う場合には〈広義のノリト〉と呼ぶことができる。先生の言われるノリトとは〈広義のノリト〉の方であり、しかも文字によって記されたものだとされている。先生の説が間違っていると言っているのではない。ノリトがもともと口頭で発せられたものであったことを想定されず、さらに〈宣下式〉〈奏上式〉というような反対の指向性をもつ多様なノリトの世界を整理されないままであったため、常に分かりにくさが伴い曖昧で神秘的な印象を残してきたということを言っているのである。白川文字学第二世代として、このノリトをめぐる問題について具体的に展開していく所存である。今はこのわずかな紙幅の中でほんのさわりだけを述べたことになり恐縮であるが、詳しくは前述の論文をご覧頂けたら幸甚である。福井での講演も時間の制約があったため、レジュメには記しておいたものの、十分なことを話せないまま終ったのが心残りであった。また機会があればこの続きを話したいと思う。

後者については、研究所の紀要に書いた文章の中でも触れているので、簡単に記しておくことにしたい。先生の文字学が他の文字学と違う点は、文字についてだけ研究されているのではなく、『詩経』などの古代文献をその社会に立ち返って読むために、またその社会で用いられた言語を復原するために、甲骨金文を研究されたという点である。したがって先生は、文字を先ず語と考えるところから出発されている。そうした側面がよく出ているのが、先生の研究の出発点であろうと思われる『日本書紀』の語彙カード作りである。先生は若い頃に『日本書紀』の語彙カードを作り、それぞれの語句がどのような時に、どのような意味で使われているか、ということを用例に基づいて分析しながら読まれていたのである。それが後に『万葉集』と『詩経』との比較研究に視点が移り、さらに甲骨金文の研究へと移っていった。先生の文字学は、このような語彙の用例を徹底的に調査し分析するという実証的な手続を踏んだ土台の上に構築されているのである。先生の学問の特質を一言にして評すれば、〈文字学を内包する訓詁学〉とでも言うことができると思う。福井ではこのことを理解して頂くために、先生が若い頃にやられた『日本書紀』の語彙カード作りのことを、具体的な作業の持つ意味をも含めて話してみたのである。

福井県立図書館には「白川文字学の室」が設置されていて、先生の文字学が形成される過程で用いられた文字カードも展示されていた。このカードを拝見するのは私は初めてだった。懐かしい先生の筆跡が刻まれたカードを目にしているうちに、カードを作りながら、用例を眺めては文字の意味を検討されている姿が目の前に浮んできて、とても感慨深かった。

講演を終えた後、先生の生家跡を訪ねてみたいと思っていたところ、担当の芹川さんが案内して下さるという。日も暮れつつあったので、半分諦めていただけに、このお誘いはとても嬉しかった。城跡近くにある先生の生家跡は楽器店になっていた。その前の路上には記念碑が建てられ「遊」の文字が彫られている。芹川さんの説明を聞きながら、ふと楽器店のすぐ左手を見ると「佐佳枝廼社」という文字が目に入った。日はとっぷりと暮れていたために、それと確かめることはできなかったが、おそらく神社に通じる道を示しているのであろう。漠然ともっていた予感が当ったのである。そうか、やっぱりそうだったのだ。今日の一番の収穫はこれだな、そんなことを秘かに呟きながら、芹川さんの声に応じて車に乗り込んだ。

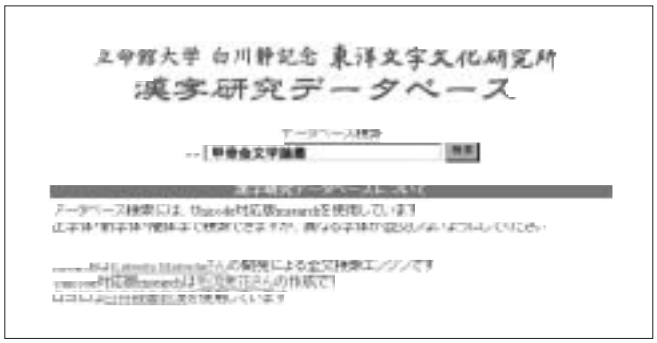
二〇〇七年度　研究事業運営委員会の活動

運営委員　芳村　弘道

二十世紀以降の東アジアにおける漢字研究の総合調査

「二十世紀以降の東アジアにおける漢字研究の総合調査」は、近代における漢字研究の総合的なデジタルデータベースを構築する試みである。本計画では、漢字研究を、①甲骨学、②金文学、③説文学、④字書・辞典、⑤音韻学、⑥訓詁学、⑦書法、⑧漢字文化など、⑨日本との関連、⑩漢字教育・行政の十種に分類し、データを入力していく。書名だけではなく、著者名・出版者・副題・分類などでも検索が可能であり、簡体字・繁体字にも対応している。

二〇〇六年度の計画であった「日本における甲骨学研究」については、すでにデータ入力を完了し、現在公開中である。本年度は「日本における金文学研究」のデータ入力作業を行っており、二〇〇八年四月に公開予定である。



検索画面のトップページを左に掲げた。「漢字研究データベース」のアドレスは次の通り。

http://www.40net.com/~kanji/index.html

研究会報告

二〇〇七年一〇月二七日午後一時から当研究所の第二回研究会が衣笠キャンパス学而館二階第2研究室にて開催された。今回は下記の通りの研究発表が行われ、それぞれについて発表者と参加者との意見交換が活発になされた（午後五時半終了）。

甲骨占卜様式の変遷　落合　敦思
白川文字学初期論文を読む　―「釈文」篇―　高島　敏夫
金沢文庫本白氏文集「長恨歌」の漢字字体の実態
―漢字字体規範データベースを利用して―　當山日出夫
復興漢字文化　―中国簡化字有問題―　高山　景行

（敬称省略）

「白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第二号の発刊

「白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第一号を二〇〇八年三月に発行した。本号は、一昨年一〇月にご逝去された白川静先生を追悼する記念号として編集し、御生前の白川先生とゆかりの深い当研究所顧問の加地伸行先生・龍谷大学教授小南一郎先生・平凡社編集部竹内涼子女史に御執筆を依頼し、御寄稿いただいた。この場を借りて厚く感謝申し上げる。三氏の特別寄稿のほか、論文篇、訳注、資料紹介を掲載している。細目は次の通り、ご一読をお願い申し上げる。

追悼記念特別寄稿
白川先生との対談の夢……加地伸行　i
白川教授の詩経研究……小南一郎　v
先生の行間……竹内涼子　xiii

論　文
讀「釋文」……高島敏夫　1
——白川文字學の原點に還る——
楊雄「答劉歆書」とその小學……嘉瀬達男　17
中國簡化字有問題……髙山景行　31
——復興漢字文化——
金沢文庫本白氏文集『長恨歌』の漢字字体の実態……當山日出夫　51
——漢字字体規範データベースを利用して——

譯　注
荎康『書舶庸譚』九卷本譯注（二）……芳村弘道　67

資料紹介
竹磎詩詞文拾遺　附鷗夢樓詩集題詞及序……萩原正樹　81

論　文
「漢字—そこに示された世界観」……シュミツ・クリストフ　*1*
——白川文字学へのいざない、「常用字解」の翻訳と紹介を通じて——
東方学における歴史的方法論を評す

研究員の主な研究活動

○上野　隆三

「中国明清白話文学研究」

論文「『漢書故事大全』校定稿」（『ヨーロッパ現存中國學資料の研究』平成一二～一四年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書・二〇〇七）

○小森　伸子

日本語書字につながる描線産出の発達過程

「幼児の描線発達と「ストロークの単位」の成立との検討」（「立命館文学」第五九九号、二〇〇七年三月）

○高島　敏夫

「白川文字学の体系の研究」

論文　周原出土甲骨の歴史的位相—殷周関係論に向けて（「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第一号、二〇〇七年三月）

「讀「釋文」—白川文字學の原點に還る」（「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第二号、二〇〇八年三月）

○深谷　圭助

小学校一年生から漢字の構造を漢字字典を活用させて学習させることにより、系統的に漢字を指導する教育方法を開発。

日本漢字能力検定協会の行う漢字検定に立命館小学校全校で取り組み、二年連続全員受験全員合格を達成。

漢字教育に関する論文

・日本漢字能力検定協会
平成十九年度　漢検教育実践賞　最優秀賞
深谷圭助「漢字辞典を活用した効果的な漢字学習法の開発」
漢字学習ドリルの刊行

・深谷圭助著『辞書引き学習自学ドリル（漢字辞典編）』（MCプレス、二〇〇七年四月）

・深谷圭助著『辞書引き学習自学ドリル（漢字辞典編２）』（MCプレス、二〇〇七年七月）

○萩原　正樹

「唐宋詞および日本詞学研究」

論文「『鷗夢新誌』発刊までの森川竹磎」

（「立命館文学」第五九八号、二〇〇七年二月）
「竹磎若年の詩詞文―集外詩詞四十九首及び佚文五篇―」
（「風絮」第三号、二〇〇七年三月）
「竹磎詩詞文続補遺」（「学林」第四五号、二〇〇七年九月）

○本田　治

「宋代水利史研究」

研究発表　「宋代明州沿海部における開発と移住」（第五二回国際東方学者会議シンポジウム「中国社会の持続と変容―その論理と実際」二〇〇七年五月）

○芳村　弘道

「唐代文学研究・漢籍書誌学研究」

著　書　『唐代の詩人と文獻研究』（中國藝文研究會発行、朋友書店発売　二〇〇七年六月）

訳　注　「董康『書舶庸譚』九卷本譯注」（一）（「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第一号、二〇〇七年三月）
同　（二）（「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」第二号、二〇〇八年三月）

講　演　「文學研究法としての文獻學―朝鮮版の集部佚存書を中心としつつ―」（二〇〇七年六月、高麗大学校）
「唐詩の新資料・朝鮮本『夾注名賢十抄詩』をめぐって―『千載佳句』との関連性―」（二〇〇七年九月、慶応大学、和漢比較文学会大会）

研究発表　「東アジア文学における『十抄詩』『夾注名賢十抄詩』の價値」（二〇〇七年六月、高麗大学校）

学生諸君との白川文字学勉強会

研究員　高島　敏夫

二〇〇七年度から有志の学生諸君と一緒に、〈白川文字学の原点に還る〉という目標を掲げて白川文字学の初期論文を読む会を始めました。もともとは、私の「中国文学特殊講義」の受講生たちが申し出てきたことがきっかけでした。私の特講の内容は、前期には文字の誕生というテーマで甲骨文字が生まれる歴史的背景を講義し、後期には甲骨文を実際に読みながら、白川文字学を実践的に理解し習得する、という趣旨で展開しています。

白川文字学に関する書物なら、先生ご自身が書かれた一般書も出ていますし、また白川ファンによって書かれたぐんとやさしい一般書も出ています。ただ、本格的に学ぶというのであれば、先生の文字学が形成される過程そのものを論理的に理解しておく必要があります。文字の字源の結論を先生の言葉そのままに口にするようなやり方ではなく、字源が導き出されてきた論証過程そのものを理解した上で、説明できる力をつけておいてほしいと思ったからです。

彼らは自身は同好会のようなものを作っていて、勉強会の時以外にも文字学や文化について話し合う機会をもっているようです。二〇〇七年度に読んだのは、東アジア文化論という性格も備えている「釈文」という論文です。専門論文としてもなかなか難しく、一般的にみてあまり通読されていないらしい論文ですので、学生が独力で読むのは容易ではありません。そこで白川論文の論旨を整理した文章を書き、彼らが読解する時の手引きとしました。これは白川研究所の紀要に掲載される予定です。来年度も継続していきます。

二〇〇七年度の文化事業活動について

運営委員　志垣　陽

文化事業運営委員会では、研究所設立の三年目にあたる二〇〇七年度に、白川文字学の一般への普及と、ネットワーク作りに重点を置いて、以下の活動を展開した。

第二回立命館白川静記念東洋文字文化賞（立命館白川静賞）

第二回立命館白川静賞の選考が二〇〇七年七月に行われ、二件の授賞を決定。表彰式が同年九月に行われた（詳細は別項に）。第三回白川静賞は、先生の三回忌を迎える今年十月を目処に選考、表彰式を実施するべく準備を進めている。

「漢字探検隊」

本年度より、京都市教育委員会主催の「みやこ子ども土曜塾」事業の一つとして「京都漢字探検隊」を実施した。小学生を中心とした子どもとその保護者を対象に、毎回一つのものをテーマとして座学ではなく、学や体験を通して漢字の成り立ちを学習する体験型の講座である。

本年度の実施講座は以下の通り。中学生以上を対象とした一般向けの「大人の漢字探検隊」も、パイロット事業として第3回・第5回・第6回の講座と同日に実施した。

回	テーマ	講座名	参加申込 一般・親子		場所
1	人体	漢字ジェスチャー（2回実施）	—	80	アカデメイア立命21
2	動物	動物園で漢字と出合う	—	66	京都市動物園
3	酒造り	水とお酒と、ときどき漢字	20	53	月桂冠大倉記念館
4	植物	植物園で漢字と出合う	—	58	京都府立植物園
5	道具	匠もびっくり、漢字の技	18	54	京都伝統産業ふれあい館
6	神	神様から頂いた漢字	40	87	北野天満宮

二〇〇八年度は京都での講座の継続と他地域での展開（5月・広島市安佐動物公園、夏季・神戸市白鶴酒造記念館ほか）を企画している。

学内の他組織との連携事業

二〇〇七年四月、立命館守山キャンパス（立命館守山中学校・高等学校）が竣工し、正門に「開設記念碑」がたてられた。これは、白川先生が生前に新キャンパスの開設を祝し、ここで学ぶ生徒に向けて寄せられた「子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝」（出典　論語述而）の言葉を、川本八郎・学校法人立命館相談役が揮毫したもの。研究所は、その解説文を担当した。

八月には、京都府立堂本印象美術館（指定管理者　学校法人立命館）で開催された企画展「アヴァンギャルドの全貌」で「漢字もアート?!美術館で感じよう」と題して協賛企画を行った。抽象画のタイトルに表現された漢字を白川文字学により解説。抽象から具象を表現しようとした中国の古代人の知恵と、具象から抽象を再構築した堂本印象の力とをともに感じ取ることのできる展観を意図した。参加者へのプレゼントとして、堂本印象画伯の抽象画と白川先生研究によるタイトルの漢字の成り立ち等を組み合わせたカードを作製、好評を博した。また、小学生を対象とした「美術館漢字探検隊」を開催、会場の随所に字源にまつわるクイズを展示し、解説を行った。

同月、国際平和ミュージアムを会場として行われた「平和のための京都の戦争展二〇〇七」ではミニ講座「戦争と平和の漢字」を実施、また十月下旬から十一月初旬の一週間には、立命館大学国際平和ミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色　文字・活字文化の日　特別企画」を開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。

立命館守山キャンパスの開設記念碑（白川静撰）

抽象画漢字カード

福井県との連携

白川先生の生誕地である福井県は、先生への「名誉県民賞」の贈呈を始め、「白川文字学の室」の開設（県立図書館）、没後にも記念碑の建立（福井市の生家跡地）、記念フォーラムの開催（県生活学習館）、文字学講座、小学校での体系による漢字教育など、様々な活動を行い、県のアイデンティティーの一つとして位置づけを図っている。研究所も資料提供や企画へのアドバイスを適宜行い、また研究所の高島敏夫研究員・伊東信夫客員研究員が出講した。

白川文字学の普及活動者とのネットワーク構築

全国で白川文字学の普及に努力されている教員や漢字研究者とのネットワーク作りに着手。書籍刊行や講座開催など具体的な成果が現れはじめている。

①小寺誠氏（京都府南丹市立西本梅小学校長）著の『白川文字学に学ぶ―漢字の知恵を生きる力に（仮題）』の監修。二〇〇八年十月に平凡社より刊行予定。

②学力の基礎をきたえどの子も伸ばす研究会（学力研…小学校教員を中心とした自主学習組織。ここでの実践から「百マス計算」などが生まれた）冬の全国大会での発表。漢字部会での報告。会員所属校での漢字講座開催。会員の「漢字探検隊」参加。広島での「漢字探検隊」実現などの成果が挙がっている。

上記の他にも、出版社や京都市内・東京都・長野県などの教員・教育企業との連携事業が始まっている。

二〇〇八年度は、既述の通り白川先生の三回忌を迎える十月を中心にさまざまな記念活動を行う。さらに既存事業の継続・発展とともに、一般向け講座の企画実施を目標に活動を展開し、「白川静文庫」が開設される二〇一〇年度（生誕百周年）に向けての企画構想期間としたい。

「白川文字学」記念フォーラム（2007年10月 福井県生活学習館）

福井県立図書館

漢字講座（神戸市立好徳小学校）

白川文字学を学ぶ漢字遊び大会（福井県立図書館）

第二回立命館白川静記念東洋文字文化賞について

運営委員　上野　隆三

第二回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」選考委員会は、各団体から推薦のあった候補者および候補団体について審議した。委員会では、まず昨年にならい、以下の三つの領域に基づいて候補の業績を評価・検討することが確認された。

A：白川静名誉所長の学問の継承・発展を目的としたもの。
B：東洋文字文化の研究・調査にかかわるもの。
C：東洋文字文化の教育・普及にかかわるもの。

日本漢字教育振興協會
理事長　土屋秀宇氏

これに基づき推薦された候補の業績を分類して審議を行い、全会一致で以下二件に第二回立命館白川静記念東洋文字文化賞を贈ることを決定した。

受賞者は一件目が日本漢字教育振興協會（C領域）。年少時からの漢字教育を提唱し、長年

にわたり幼児・児童に対する多彩な漢字教育活動を続けておられることを高く評価した。二件目がロシア科学アカデミー東方学研究所研究員のエヴゲーニィ・イヴァーノヴィチ・クチャーノフ氏と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授の荒川慎太郎氏（B領域）。両氏は地道な資料収集と分析に取り組み、世界初の『タングート（西夏）語辞典』を完成させた。タングート（西夏）語の文字はもちろん漢字ではないが、まさしく「東洋文字文化」の概念および本賞の趣旨にかなったものであり、また世界のタングート研究者待望の辞典であることを高く評価したものである。

そして二〇〇七年九月二十八日、立命館大学朱雀キャンパスにて表彰式を行い、当研究所所長である学校法人立命館の川口清史総長より、表彰状と副賞が授与された。

今回も各機関よりご推薦いただいた中には、優れた内容のものが多数有り審査は非常に白熱した。残念ながら今回は最終的に受賞には至らなかったものも水準的には十分に受賞に値すると考えている。

本賞では、今後も上述の通り三つの領域に基づく審議を行うこととしたが、これまで以上に東洋文字文化研究に資する賞とするための方法は様々に模索していきたいと考えている。これからも多数の応募があり、優れた業績を表彰できることを期待している。

Ｅ・Ｉクチャーノフ氏（左）と荒川慎太郎氏（右）

「字書三部作」を温家宝総理、中国の三大学へ贈呈

立命館学園は古くから中国との交流を進めてきた歴史を有している。このような背景の下、二〇〇七年四月に中国の温家宝総理が本学を訪問され、学生と交流された。その際、温総理からは『文津閣四庫全書』が贈られるとともに、立命館からは字書三部作（『字統』『字訓』『字通』）を贈呈した。温総理はまた学生を中国に招待することも発表され、それを受けて二〇〇八年三月に学生二百三十名を中心とする立命館代表団が訪中し、北京大学・北京航空航天大学・上海交通大学と交流を行い、三大学学長にも三部作を贈呈した。

「かつて東洋は、一つの理念に生きた。東洋的というのは、力よりも徳を、外よりも内を、争うことよりも和を、自然を外的な物質と見ず、人と同じ次元の生命体として見る精神である。（中略）そういう生きかたは、殊に漢字を共有するということによって確かめられた。（中略）漢字は重要な紐帯となっている。（白川静・渡辺昇一『知の愉しみ　知の力』）」

本学園は、アジア太平洋地域をはじめとする国際社会の平和と発展を担う人材の育成という使命を自らに課している。白川先生ご提唱の「東洋の復活」にも通じるものである。今後も先生の成果を国際的に伝えていきたいと考える。

仮配架された「白川静文庫」の書籍

書斎で御研究中の白川静先生

初期論文等の白川先生自筆原稿

「白川静文庫」の開設準備

白川静先生の御蔵書が、御遺族のありがたい御厚意により一括して本学に寄贈され、衣笠キャンパス図書館に「白川静文庫」として所蔵されることとなった。二〇〇八年一月一六・一七日に搬入が行われ、その後、開梱作業を終了し、現在、図書館五階に納められ、整理登録、目録化への準備が進められている。

御遺蔵書は、先生の淵博な学問を反映し、甲骨・金文学、文字学、文学、思想、歴史関連の中国書や雑誌のほか、国文学、民俗学など広い分野に亘っており、その冊数も概算一万数千に及ぶ。また御手稿、御自筆のノート・資料類も含まれており、「白川学」の形成過程を理解する上に極めて貴重である。例えば、先生の処女論文「卜辞の本質」などの原稿や甲骨文字のトレース資料が遺されている。なお、白川先生が御生前に当研究所に寄贈された正・続『皇清経解』の唐本や『甲骨文合集』『殷周金文集成』『本居宣長全集』なども「文庫」に併せて収蔵されることとなった。

「白川静文庫」の構成としては、一つに白川先生の御著書と御論文等の掲載誌、御自筆の原稿・ノート・資料類をまとめ、二つに他の編著者の書籍や雑誌、三つに線装本の漢籍・和書を配架する考えである。正式に「文庫」として開設されるのは二年後と予定されている。

編集後記

○白川静先生がお亡くなりになって、まもなく一年半になろうとしています。当研究所はもちろん、多くの方々にとっても、先生をうしなった喪失の思いは深く大きいままですが、この一年半の間に、先生の御逝去を追悼し、また先生の生涯や御業績をあらためて評価しようという動きも起こっています。当研究所の紀要が第二号を先生追悼の記念号として発刊したのをはじめ、文学部中国文学専攻の機関誌『学林』においても、受業生による先生の追悼論集がまもなく刊行されます。また御業績を評価する動きとしては、昨年七月に発行された雑誌「大航海」第六三号（新書館）が「白川静と知の考古学」という特集記事を組んだのが、記憶に新しいでしょう。さらに今年二月には、ＮＨＫ教育テレビの「知るを楽しむ　私のこだわり人物伝」において先生が取り上げられ、松岡正剛氏により四回にわたってその生涯とお仕事が紹介されました。この番組において松岡氏は、先生を「大いなる思想者」ととらえています。先生が残された巨大な学問と、そこに通底しあるいはそこから広がっていく思想は、今後もたくさんの人々を魅了し、またその人々によってさまざまに語られていくことでしょう。当研究所も先生の御研究と御遺志を継承し、東洋の文字文化発展のために引き続き努力を傾けていかなければならないとの思いを新たにしています。さらなる御理解と御支援をお願い申し上げる次第です。

○本号の冒頭には、当研究所の副所長である木村一信文学部長から寄稿いただいた「白川先生の『戦場』」と題する一文を掲載しました。先生の御自宅書斎のことは諸書でしばしば紹介され、その写真を見た方も多かろうと思いますが、実際にその書斎を見た衝撃を「圧倒される思いで、言葉も発せず、その場の情景をただ眺め続けた」と記しておられます。そこはまさに、先生が「『命』を賭して研究を進められ」た「戦場」でした。一日二〇枚という驚異的な執筆活動を続け、一生現役の学者として亡くなる数日前にも天井の甲骨文字を解読しようと奮闘された先生のお姿は、熱く胸に迫ります。

○シュミツ・クリストフ博士の「白川先生との出会い」では、先生と西洋の学究との交流のさまが活写されて大変興味深いものがあります。博士の率直な質問に真摯に答えられる先生、またその先生の熱心なお話にどんどん魅了されていく博士、お二人の様子が目に浮かぶようです。先生の学問を漢字文化圏以外にも広く伝えようと努力されているシュミツ・クリストフ博士に、心から敬意を表したいと思います。

○高島敏夫研究員からは、昨年十一月四日に福井で行われた「白川静先生没後一周年記念講演」の報告を頂きました。白川文字学の特質と展開に関する講演内容とともに、福井県立図書館「白川文字学の室」や先生の生家跡を訪問された感慨を述べておられます。なお生家跡の「遊」字の記念碑は、本誌巻頭写真として掲げております。

○二〇〇七年度「研究事業運営委員会の活動」は芳村弘道運営委員の執筆です。データベース「二十世紀以降の東アジアにおける漢字研究の総合調査」の進捗状況や、研究会、紀要、各研究員の研究業績など、今年度も充実した研究活動が行われたことが報告されています。また今年度から新たに始まった活動である「学生諸君との白川文字学勉強会」について、高島敏夫研究員より報告を頂きました。

○「文化事業活動について」は志垣陽運営委員による報告です。学内他組織との連携事業の他に、福井県や普及活動者とのネットワーク、また好評であった「漢字探検隊」の活動などが紹介されています。来年度の「漢字探検隊」は京都以外の地域でも企画されており、当研究所活動の益々の広がりが期待されます。また「第二回立命館白川静記念東洋文字文化賞」の選考報告、受賞者紹介、表彰式のあらましは上野隆三運営委員によるものです。

○二〇〇七年四月の温家宝総理来学の際、白川先生の「字書三部作」を贈呈いたしました。立命館と中国との関連は近年益々深まっていますが、表面的な交流に終わることなく、先生の言われる「東洋の復活」へとつながるものであってほしいと思います。また今年一月、白川先生の御蔵書が一括して本学に寄贈されました。二年後の「白川静文庫」開設をめざし、現在準備が進められています。紹介記事にもありますように、先生の学問を理解する上で非常に貴重な資料が多く、大切に保存していくとともに、広く利用されることを期待しております。

（萩原正樹記）